

「かもしれない」の成り立ちについて

播 磨 桂 子

〈1〉はじめに

現代語において、「かもしれない」という表現は、一まとまりの形式として定着し、複合辞として認められるものである。現代日本語研究においては、しばしば「にちがいない」「だろう」「ようだ」「ぞうだ」「らしい」など、推量あるいは推定を表す形式とともに論じられ、確信の度合いの低い、あるいは事柄の真である可能性・蓋然性の低い判断を示すとする記述が大勢をしめる。(注1)

これに対し、批判的立場を取るのは三宅知宏(1992) 大鹿薫久(1992)であり、ともに「かもしれない」は可能性の認識を表すものとする。三宅(1992)では、「かもしれない」を「可能性判断」という「認識的モダリティ」の一つの下位類に位置づけ(注2)、それは、可能性の程度(確からしさ)についての認識ではなく、「命題が真である可能性がある、との認識を表すもの」であり、その命題の可能性に関する認識は、話し手の信念とは別物である、と述べられている。

語構成からみると、「かもしれない」は疑問を表す助詞「か」、係助詞「も」、自動詞「しれる」、打ち消しの助動詞「ない」の組み合わせ

「かもしれない」の成り立ちについて

わせであり、ある事柄が成り立つかどうか判定不能とする判断を表すと考えられ、話し手の信念に関わりなく「命題が真である可能性があるとの認識を表す」のは「かもしれない」の本義と推測される。このような「かもしれない」の語構成から意味の特徴付けをかけた論に、須賀一好(1995)がある。須賀氏は、ある事態について「わからない」という判断を下す意味が、蓋然性の低い事態を対象とすることから「可能性も排除できない」という意味を表し得るようになり、それが蓋然性を問題にしない事態に対して用いられ、単に可能性を表すようになった、としている。

語構成上の意味からの派生を考えるならば、「かもしれない」の時代をさかのぼった観察によつて、その確認を試みることができよう。

本稿は、「かもしれない」の成立や用法の派生の検討を通して、この表現形式の性格について考えようとするものである。

〈2〉「…しれぬ」「…しらぬ」の形式の表現について

「かもしれない」の出現を文献上に見出そうとすれば、近世初期

にこれに類する複数の形式を拾うことができる。すなわち、ある不確定の要素をもった事柄に対し、四段活用「知る」の未然形、または下二段（下一段）活用「知る（知れる）」の未然形に打消しの助動詞が接続した「しらぬ」「しれぬ」により（注3）、話し手がある事柄のある要素について確定を成し得ないことを明示する、「……かしらぬ」「……ぞしらぬ」「……もしれぬ」「……かもしれぬ」などである。

これらは「知らない」「わからない」という語彙的な意味を表すものから、その語彙の意味が薄れていて、助詞的あるいは助動詞的な働きをしているように見えるものまで幅があるが、単に「Aさん知らない」「AはBが彼をだましていることを知らない」といったあるモノやコトそのものを「知らない」というのとは異なる。「しらぬ」「しれぬ」とされる不確定の要素については

(a) 不定語（注4）で示される場合

(b) 複数の案が示される場合

(c) 一つの案が示される場合

があり、(c)は複数の可能性の中から一つを選択して言語表現するものであるから、「知らない」「わからない」という語彙の意味は薄れやすい。

このような表現のうち、次の(1)(2)のように、構成要素として四段活用未然形を有する「……しらぬ」という形式で、疑問詞や疑問助詞によって示される疑問表現を上部要素とするものは、話し手の「疑い」を表わし、やがて助詞「か」と熟合して、疑いを表わす終助詞「かしら」を成立させたことがすでに論じられている。（注5）

(1) いつも廿七八日此にたもるが、いま、てたらぬは、ことしはくれまひとおもやるかしらぬ（虎明本狂言・よねいち）

(2) やらきどくや、おもてがためくが、何事ぞしらぬ、いやこれは何ものぞ（虎明本狂言・三人がたは）

古くは上部の疑問表現が説明要求か判定要求かで差があり、説明要求の場合の「疑問語：ぞしらぬ」と判定要求の場合の「……かしらぬ」の形式があったが、疑問表現の変遷と平行して、「疑問語：ぞしらぬ」から、「疑問語…（体言）じやしらぬ」「疑問語…（終止連体形）しらぬ」へ移行し、同時に「疑問語…（体言／終止連体形）かしらぬ」という形式も用いられるようになり、「かしらぬ」へ収束していく傾向が見られるという。

「かしらぬ」が、元来上部の疑問表現を判定要求のものとしていたということ、話し手が一つの解答案を選択して提示していることになり、説明要求の疑問表現を上接する形式よりも「知らない」という語彙が薄れやすかったことも、終助詞として「かしらぬ」へと収束していった原因の一つと考えられる。

現代語「かしら」へとつながるこの表現の形式上の特徴は、上部要素が独立した疑問文とも取りうる点と、下部要素が四段活用助詞「知る」の否定形でなされる点である。したがって、疑問表現に「知る」を付して、ある疑問について話し手が解答を持たないことを明示することから、疑いの表現であることを明確にする形式となり

えたものと思われる。

これに対し、下二段（下一段）活用「知る（知れる）」の否定形では、ある疑問について話し手が解答を持たないのではなく、対象の側に確定できないものがあるという認識を示すことになる。したがって上部は独立した疑問文とは取り得ない。便宜上、伴う助詞により、(A)「…やらしれぬ」(B)「…かしれぬ」(C)「…もしれぬ」(D)「…かもしれぬ」と分類し、用例の検討を行う。

〈3-1〉(A)「…やらしれぬ」

「…しらぬ」「…しれぬ」などの形式で、話し手がある不確定の要素について確定をなし得ないことを表す言い方の中で、早く現れるものは、「にやあらん」から生じたとされるヤラを伴う例である。「にやあらむ」の形では、山口堯二（1990）に報告されている今昔物語の例がある。

○此ノ今來タル者、男ニヤ有ラム、法師ニヤ有ラム不知ズ、（今昔物語・二十八・四十四）

ヤラを伴う、「…しらぬ」の例は、十六世紀の抄物にも例を拾うことができ、上部の不確定の要素は、(a)不定語(b)複数の案によって示され、「…しれぬ」は「わからない」という語彙的意味を表している。

「かもしれない」の成り立ちについて

(1) 其如クニ学丈稽古シテ行ハ何タル者ニナラウヤラ知ヌソ（蒙求抄 2・27・ウ）

(2) 南へ行フヤラ北へ行カフヤラ知ヌソ（蒙求抄 1・32・オ）

(3) 尉ハウツノ音ヤラウイノ音ヤラウシラヌソ（蒙求抄 2・2・ウ）

近世以降「…やらしれぬ」の形式が表れる。先に挙げた「…やらしらぬ」と同様に、上部の不確定の要素は、(a)不定語(b)複数の案によって示されるものであり、「…しれぬ」は、「わからない」という語彙的意味を表しているが、「えたいのしれない」という言い方に見られるような、対象となる事物に否定的な感情を持つて用いられる場合が多い。これは、対象の側の性質として「しれない」と認識することにより、言語主体が話題とする対象に関して「知らない」と認識するのは異なる表現性を持ったのであろうと思われる。

(a) (1) 何者が喰ふたやら知れぬ、茶碗のしかも欠けたやつで、二三盃

引掛（教訓雜長持）

(2) しからば聴聞仕れと何やらしれぬ懐帳（博多小女郎波枕）

(3) さるに依つて、常に腹のうちを吟味して、用心をいたしませぬと、どんな大事をひき出し、悪名を流さうやら知れませぬ。（続々鳩翁道話・有朋堂文庫「心学道話集」）

(b) (4) 殊にえたと寝たやら癩病人とねたやらしれぬ物を一ツ夜着へ入

ルはむさきものにあらずや（白増諺言經）

(5) 軍の門出で勝やら敗るやら知れないのに死とハ餘まりな思ひ切り様（開明小説 春雨文庫・明治文学全集1 明治開化期文学集）

「ヤラ」によって示される事柄の不確定の要素が(c)一つの案で示される例は皆無とは言い切れないが、複数の解答案を示すのが「ヤラ」の用法であり、一つの解答案を選択して示すのは、他の形式に担われていたと思われる。

〈3-12〉(B)「…かしれぬ」

力を伴うものでは、不確定の要素について(a)不定語で示される場合(b)複数の案が示される場合(c)一つの案が示される場合の三通りである。(a)の例が多く、「どんな」や「幾度」「何度」など程度性を持つ不定表現を伴い、程度を強調する用法が特徴的である。

(a)

(1) よく罰もあたらねへぜなア。金比羅さまも成田さまも幾度だまたしたかしれぬへ（浮世床）

(2) オットけんのんく。其盃をすけて見たが宜い、直にこつちへお鉢がまはつて、どんな目に合ふか知れやアしねへ（伊呂波文庫・有朋堂文庫）

(3) アラ那奴はマア憎い奴で、御主人様の御金を百両盗みました位な者ですから、どんな拵らへ事をしたか知れません。（怪談牡

丹燈籠・日本近代文学大系1 明治開化期文学集）

(4) もう、何度雨ごひをしたか知れない。（国定読本用語総覧・第五期）

いずれも、「しれぬ」は「わからない」という語彙的意味を持つてはいるが、単純にそのみで使われているのではない。たとえば、(1)で話し手の言わんとしているのは「幾度だましたか」が「わからない」ということではなく、「幾度だましたかわからない程度度もだました」ということである。(2)(3)(4)も同様で、「しれぬ」は単に何かが「わからない」ことを示すのではなく、程度を強める表現として使用されているのであり、そこには話し手の情意が含まれる。

(b)

二つ以上の解答案の並立の場合は、「しれぬ」が「わからない」の語彙的意味そのものにより使われている例が見られる。

(5) 道ノ二アルヲ岐ト云ソカヨウカ、ヨハヌカ知レヌソ（蒙求抄

1・40・ウ）

(6) 此ごろの商法ハ往昔と違ひ買出しが肝心ゆゑ去来船が出帆すると言やア出先から直に江戸へ走るか又ハ長崎へ往か或ハ支那の上海香港へ渡るか知れぬが若その様な事でも有たら（開明小説 春雨文庫）

以上(a)(b)では、(a)で述べたような情意的な表現はあるものの、「しれぬ」は語彙的な意味が表面に感じられるものであったが、次の(c)

では、話し手の推量を表現するに近いものが見られる。

(c) (1) (2)は、従属節で用いられた例である。(2)は、現代語の「かもしれない」とほぼ同じく可能性の判断の表現である。(1)は形式上は(2)に類するが、「知れませんが」は、「見てわかるか(どうか)」がわからないという語彙的な意味を持っている。

(1)私が見てわかるか知れませんが、そんな面白い物なら拝見致しませうかネエ(伊呂波文庫・有朋堂文庫)

(2)へい又者にか誑されましたか知れませんが、篤と源助が取調べ御挨拶を申上りますまで御手打の處は御日延を願ひたく存じます。(怪談牡丹燈籠)

文末の叙述の例は、次の(3)(4)である。ともに、ある判断を提示し、その判断があっているかどうか「わからない」とする意味を持ち、「かもしれない」に置き換ええ可能と思われる。ただし助詞「モ」を欠くため、他の可能性を暗示する含みがないように思われる。

(3)支度にもまいりましたかしれません(伊呂波文庫)

(4)事に因と自己が往ても隠れて遇ぬことが有から何でも一日論見あらうか知れぬへと察したゆゑ(開明小説 春雨文庫)

(a)の用法は、現在も普通に用いられているが、(b)や(c)はあまり見られない。

「かもしれない」の成り立ちについて

おそらく(a)は情意的な程度強調の表現として存続したが、(b)は「れぬ」という語が、「わからない」という語と交替したことにより衰退し、(c)は「かもしれない」へ統一されていったものであろう。

助詞「カ」を伴う表現のうち、四段活用動詞による「しらぬ」を有するものは、先述のように、終助詞「かしら」のもととなる語法とされるが、従属節にあるものは、当然終助詞の意味は持たないのであり、(c)の(1)(2)の例とほぼ同類の例が見られる。

次にあげる例(5)の「しらぬ」は、「知らない」という語彙の意味そのものとして用いられており、(c)の(1)に類する。(6)は、仮定条件のもとでの可能性の想定を表しており、「かもしれない」と言い替え可能と思われる例で、(c)の(2)に類する。

(5)とんな女郎かしらぬが。おれがよふなものには。とんだものずきだ。(一事千金・洒落本大系8)

(6)カウシテウエテサへオイタナラバコレカラ後秋ト云時ガナイコトガアツタラバコンサカヌ事モアラウカシラヌガ 秋ト云時節サヘアラバ咲カヌト云事ハアルマイ(古今集遠鏡)

このように、従属節では「…かしらぬ」と「…かもしれぬ」の間にあまり差異は生じない。それでは文末の用法はどうであろうか。

(7)山ノ両岐ト云モノアイソニモノ九モ多コトチャホトニ多コトカ知ヌソ(蒙求抄 1・41・オ)

(8)ようじん、このくらさでは、足もとになにもがいのるかもし

れまひ（大じんばしらのもとで）御用心ばけものが有かしらぬ

（虎明本狂言集・くいか人か）

(9) くゞり戸出るより、調子高に、はうばいを誇り、朝夕の汁がうすひの、はさみを、くれる筈じやが、たる、か、しらぬ、とひとつとして聞べき事にもあらず、（好色一代男・井原西鶴 総索引・1）

(10) 鯛やす、きはとられたか知らぬ、さても心もとない事ではある

（鳩翁道話）

(11) 銘々共も受取の書かれぬ株じやないか知らぬ。（松翁道話）

(7) の例は「多イコトカ」とする想定の根拠が、(8) の例は「ばけものが有るか」と想定する状況が示されており、不確かな判断を表す表現とも取り得る。しかし(9)以下三例は、話し手は判断を保留しており、明らかに疑いの表現をなしているため、「かもしれない」あるいは「だろう」のような表現とは置き換えできない。

この「しらぬ」は、判定の放棄・保留という言葉主体の認識作用を語彙的に表現したものであるため、文末に用いられた場合、疑いという主体的な表現を成し、終助詞化したといえよう。

〈3-13〉(c)「…もしれぬ」

モを伴うものでは、不確定の要素については(a)不定語で示される場合(c)一つの案が示される場合の二通りで、複数の案が示される例は見られない。また、モによって取り立てられる内容は、その多くが推量の助動詞「ウ(〜)」を持つ(注6)。この場合、「…もしれぬ」

は未然の事象の想定である。

(a)

不定語で示される例では、ほとんどが推量の助動詞ウ(〜)を有する未然の事象の想定であり、それも以下に挙げる例のように危惧の念を持って想定されている場合が多い。また、今まで見てきた不定語で示される場合と同様に、「しれぬ」は「わからない」という語彙の意味で解することができる。

(1) 後生可畏 ワカイ人ハアナドラレヌ後二ドノヤウニナラウモシ
レヌコトニ（唐音世語・唐話辞書類集・第八集）

(2) どの様な事が出来うもしれぬとひやく／＼思ひ通じや。（松翁道話）

(3) 其外古道具、古手見せ、質屋の蔵に、つんであるしろものは、皆身代をふみ潰した兵、どこに埋伏して居ようもしれぬ、御油断は成りませぬ。（続々鳩翁道話）

(4) 何様なり彼様なり母を養ひ二人の子供を養育するに事ハ欠ぬと信ずれども幕府の勢ひます／＼盛んなる時ハ如何なる祟りの有んも知れず若し左様なると何にも知らぬ徳太郎や庄吉までが草葉の肥しと成りて果んと思へバ不惑と胸塞がりすやく（開明小説 春雨文庫）

(b)

解答案の真偽判断においても、未然の事象の想定が多い。この未然の事象の想定は推量とは性質を異にし、起こり得るいくつかの事

象の中から、その蓋然性の度合いに関わりなく一つの事象を取り上げるものである。蓋然性の度合いに関わりなく、さまざまな事象の可能性の中からある一つの事象を取り上げる場合、そこにはなんらかの意図があるのであり、それが期待であったり危惧であったりするものと思われる。「もしれぬ」に危惧の念を感じる例が多いのは、このある一つの事象を取り立てたことを示す助詞モの持つ含みの働き、および「しれぬ」が対象についての認識不可能を表すことによるものであろう。

以下の例は、現代語であれば「かもしれない」が用いられるところであろうが、上述のように、推量の助動詞を伴う未然の事象の想定で、危惧の気持ちが強有感じられる表現である点、より限定された表現であると思われる。

(5) あ、それで落付た高つきのおち森右衛門、あふてはなんぎ爰へ尋てこふもしれぬ、はやふはづしてあひ共ないと思へどきうにもた、れねば、(女殺油地獄・近松門座衛門 総索引)

(6) 髭額をぬいて、どや／＼すれバ、かゞミやのていしゆ興をさまし、此やうに人立がしてハ、けんくわがあらふもしれぬ。皆追はらへといふ(軽口独機嫌三卷)

(7) かの六弥太ががんばつたりや止にならふもしれずとの先ぐり(遊客年々考 洒落本大成 第三卷)

(8) コノ以後アレニ似タ事体ノアルトキ直方門ノ者カ敵討モシレヌ浅見門下ノ者カ復讐スマイモシレヌ(黙齋先生語録・近代語研究・第四集)

(9) うろたへると銘々どもの腹の中にも、此やうな鬼が住んであよ

「かもしれない」の成り立ちについて

うもしれませぬ。(鳩翁道話)

ところが、次のように助動詞ウを伴う未然の事象の想定でありながら、危惧の気持ちは含まない用法も見られる。この場合、「当て」という語があることから、話し手の期待の気持ちを感じられはするが、三つの「可能性」をあげており、「かもしれない」と同様、話し手の情意とは離れた可能性判断であると見なしてもよいだろう。

(10) コレどふして下さる。けふ中に算用して下され。なるほど、だん／＼おそなハリ、気のとくてござるか、もちつと待て下され。急度した当てが三つござる△ソレハ、とうしたあてたの△サレハ、一つハひろをうもしれず。二つにハ誰ぞ、くれうもしれぬ△コレ／＼、夫レはつかもない当て事た△イヤ、もふ一つは、きつとした事だ△シテ、それハなんと△イヤ、其内責様が死なふも知れぬ(再成餅「斬本大系」)

そして次のような例になると、未然の事象の想定ではなく、現実の事象に対しての判断となっている。現実の事象における未確認・不確定の内容について、ある可能性を想定し、確定不能のこととして挙げるわけだが、その可能性の想定は話し手の推量に関わる。たとえば、(11)では「半時ほどすぎて、音も沙汰もなし」ということから、「かの男」が気を失ったことを推量し、可能性として挙げているのである。

(11) 半時ほど過て、音も沙汰もなし。あまりしつかな。気を失なつたもしれぬと、戸の透間からのぞけば、かの男、こそり／＼と

まんどうをくひ、蒸籠大かたたいたいらけた様子。(一の富「嘶本大系」)

(12) ヤイ小僧よ。おれがせつかく仕まつて置タものを、よくくらつたな。イ、エ、わたくしハぞんじませぬが、如来様があがつたもしれませぬ。其せうこにハ御口に。(今歳笑「嘶本大系」)

なお、この形式にも、少例ではあるが、「しらぬ」が用いられた例がある。上に見てきた「…もしれぬ」と何ら異なりはないようであり、(14)では、同じ内容の文に、しかも隣接して「…もしれぬ」「…もしれぬ」両方が用いられている。

(13) 仕合のわるい時はなんでそんをせふもしれぬ(夕霧阿波鳴門・近松門座衛門 総索引)

(14) 主めつたな事を云ふな。弘法様だもしれぬといふを聞、坊主立とまり、なむ三、頭われたといふ。主扱もくふとい坊主だ。

弘法さまだもしれぬと云ふたりや、頭われたとぬかしたといわれ(高笑ひ「嘶本大系」)

〈3-4-1-1〉(D)「…もしれぬ」

カモを伴うものの不確定の要素は、モを伴うものと同様、(a)不定語(b)一つの案として示される。推量の助動詞ウ(ン)を有する例は、「…もしれぬ」の場合に比べ少ないが、未然の事象の想定の場合には、やはり危惧の念を強く示すものが多い。

(a) これも、モを伴う形式と共通するが、上部の不確定の要素が不定語により示される場合、未然の事象の危惧の念を強く持った想定であり、「しらぬ」は「わからない」という語彙の意味で解することができる。

(1) ごようじん、このくらさでは、足もとになにもがいのるかもし

れまひ(大じんばしらのもとで)御用心ばけものが有かしらぬ

(虎明本狂言集・くいか人か)

(2) 御酒も随分気を散んじますから少々は召上つても宜しう御坐い

ますが、多分に召上でお酔なすつては、仮令どんなに御剣術が

御名人でも、悪漢がどんな事を致しますかも知れません。私は

夫が案じられてなりません。(怪談牡丹燈籠)

(3) 餘り能く御寝なると、何様な英雄でも、随分悪漢の為に如何なる目に逢ふかも知れません。殿様決して御油断はなりません。

(怪談牡丹燈籠)

(4) 萬一物でも言ツたらどんな目に合はうかも知れず、夫よりも些

とも速くお知らせ申す方が宜からうと、急ぎあわてて帰つて参

りやした(伊呂波文庫)

(b)

(5) (6) の例では、助動詞ウ(ン)が用いられており、危惧の念が感じられる、未然の事象の想定である。おそらく、「もしれぬ」とほぼ同じ表現性を持つものであり、(5)の「味噌といはれやうかも知れず」

は、「味噌といはれやうも知れず」と置き換えても差し支えなささうである。

(5)己が懺悔は皆の衆の聞やうで、味噌といはれやうかも知れず。

(教訓雑長持 日本思想大系 近世町民思想)

(6)何時を限りと定メもなきうきかんなん、其上めぐり逢ましても、萬一返り打になりませうかも知れません。(花暦八笑人・岩波文庫)

モを伴うものには上部要素に助動詞ウ(シ)を持つ例が大部を占めたのに対し、カモを伴う例では、あまり見られない。したがって、現実の事象に対して、話し手の推量によつてなされた判断が示される用法が多くなつてゐる。

その例は次の通りである。(7)の例は、モを伴う例の(14)「弘法様だもしれぬ」と同趣向の断であり、「もしれぬ」「かもしれぬ」の用法が重なる証となるおもわれる。しかしこれ以降このような「かもしれぬ」が、現代に至るまで多く用いられるのに対し、「もしれぬ」は近世以降衰退したようである。「かもしれぬ」の場合、想定する事柄の不確定が助詞力によつて明確に示されるため、助動詞ウを用いず、未然の事象についても現実の事象についても表現できたためではないかと思われる。そこには、助動詞ウの連体用法の衰退との関連も考える必要があろう。

(7)これ、めつたの事をいわぬ物じや。得て弘法様か、人の心を引
見るため、きたない形ておあるきなさる。それかもしれぬとい
へば、願人、行ながら、南無三ン、あらわれたと言ふ。(鹿子

「かもしれぬ」の成り立ちについて

餅後篇譚囊 安永六年「断本大系」

(8)然シコレモ悪口カモシレヌ (黙斎先生語録)

(9)ナルホド、オマヘノナカマハ、ズキブン多イ。オレノ方ガ少イ

カモ知レナイ。(国定読本用語総覧・第一期)

(10)さうさ、中ほどまでは降つてゐるかも知れない。(国定読本用語総覧・第三期)

なお、一例ではあるが、「…やらもしれぬ」の例があり、「かもしれぬ」と同様に用いられているが、疑点を示す助詞としてヤラよりもカの方が優勢となつたため、「かもしれぬ」が定着していったものと思われる。

(11)是は自然、病気の事やらも知れぬと、わざ／＼上方より大医を

まねき、容躰を見てもらひましたれば(開運出世傳授 天明中

刊行・心学道話全集 第一巻)

また、この話し手の推量による判断の根拠が、助詞カラなどによつて示されるのが以下の例である。これらの例では、ある想定をなす根拠が示されるわけだから、話し手は単に起こり得る一つの事象を挙げるのではなく、蓋然性を持つ判断を為していることが明確であり、「しれぬ」の「わからない」という語彙の意味は潜在化している。

(12)それでも富本の浄りにそも／＼角力のはじまりハ印度にてハ
仏在世といふ文句が有から此國が元祖かもしれねへ(西洋道中

藤栗毛・五編上 明治開化期文学集一)

(13)文助や、大変だ。今土手で五人の追剥が出て己の胸ぐらを掴ま

へたのを拂つて漸やく逃げて来たが、おみねは土手下へ降りたから、悪くすると怪我をしたかも知れない。どうも案じられる。

(怪談牡丹燈籠)

(14) 殿様は何時でも大曲りの方をお通になるから、あつちの方から往けば、途中で殿様に御目に懸るかも知れない。(怪談牡丹燈籠)

もう一つ、現実には生起している事象に対する判断を表すことの意味として、助詞ノの使用があげられる。助詞ノが上接する例は、今回採取した用例では、十九世紀半ばから見られる。

(15) 下太「何様して此処に居たのだらう 茶め「大愚の身代わりに立たのかも知れねへ(七偏人・五編上・1857)

(16) 天窓の皮を引つ、たので根性へ斜がでたのかも知れねへ(七偏人・三編下)

(17) 成程手前の云通り、何だかゴチャ／＼咄し聲がするやうだから覗いて見ると、蚊屋が吊て有て、何だか分らないから裏手の方へ廻るうちに、咄し聲がパツタリと止んだやうだから、大方直りが有て幽霊と寝たのかも知れねへ。(怪談牡丹燈籠)

(18) あ、火の勢が一そう強くなつた。又隣へうつ、たのかもしれない。(国定読本用語総覧・第一期)

もちろん未然の事象の想定をなす用法も、「かもしれぬ」の特徴であり、次のような仮定条件のもとでの想定や、反実仮想も現代語においてよくみられるが、語法的に危惧や期待といった情意的な表現をなすものではない。未然の事象の想定の場合に、危惧の念を含

まないようになつたのは、「かもしれぬ」が可能性の判断を述べる語法として確立したためであろう。

(15) 成程、あの位譯のわかる幽霊だから、そう云たら、得心して帰るかも知れねい。殊に寄ると百両持て来るものだヨ。(怪談牡丹燈籠)

(16) 渡し賃が高いといつて、一人で越した程の人だから、此の大金が無かつたら、気が違つて死ぬやうな事になるかも知れない。

(国定読本用語総覧・第四期)

(17) 若し此の仕事が進まなかつたら、よし何萬・何十萬の人がこゝに送られて来ようとも、パナマ運河は完成しなかつたかも知れません。(国定読本用語総覧・第四期)

〔3-4-2〕用法の派生

以上あげてきたような未然の事態や、現実の事象についての可能性の判断から派生したと思われる用法を次にいくつか挙げよう。

I 話し手がある判断を為すときにもちいられ、可能性の判断や推量と言うよりは、むしろ婉曲の効果を持つように思われるのが、以下のような場合である。「……といつたほうがよいかもしれない」という形で述べられることが多い。

(18) 月に兎はい、が日に風はちつときたねへ取合ハせじやアねへかしかし太陰曆のお月さまは御廢して兎から租税が出るから風の方がい、かもしれねへ(西洋道中膝栗毛・十三編上)

(19) あれは「海」といはれる部分ですが、月には水一滴ありません

から、海といふより平原といつた方がよいかも知れません。(国定読本用語総覧・第四期)

(20) 赤道といふ文字は、…略…、落日の美観をいひ表すに、最もふさはしい文字かも知れない。(国定読本用語総覧・第五期)

II また次のように、接続助詞により逆接される後件の判断に対する前置きや譲歩などの提示をする場合がある。これにも、聞き手に対する配慮を表し、自己の主張の強さを和らげる点で、婉曲の効果を出す場合と共通する。

(21) 自惚ハちつとばかりあるかもしれないねへが瘡気といツちやアくすりにしたくもけちりんほどもねへはづダ(西洋道中膝栗毛・拾編上)

(22) 決して只饒舌て居る様な無意味淡泊なものでハありません。あるかもしれないがそれハ圓朝の続き話を筆記した様なもので、文章とハ云はれない(『近代文体形成資料集成 発生篇』(七五)すべつた楼ころんだ「思付きたる事其一・明治21・12・16-18」読売新聞・寄書 明治文庫蔵)

(23) ホンニ姉さんの被仰とほりかもしれません若左様だつたらマア大変ぢやア御座いませんかと(開明小説 春雨文庫)

(24) 些々其様な気味が有かも知れねへが残らず左様といふ訳にも往めへ(開明小説 春雨文庫)

III IIのような表現に連続して、話し手の発言自体や行動についての弁解的な表現に用いられることもある。

「かもしれない」の成り立ちについて

(25) お笑ぐさかも知れませんが、其節の句は、夜の中に雲井に名をや郭公トいたしました(伊呂波文庫)

(26) 二月三月ハ帰られますまひ夫だから些餘けいかも知れませんが、例のお膏薬を十包みほど願つて戴けと申しました。(開明小説 春雨文庫)

ここまで述べてきたように、「かもしれない」には、起こり得る事象の想定から、話し手の推量による可能性の判断を表す用法への変遷がみられる。話し手の推量による判断を表す場合、そこには話し手の「確信の度合い」が生じるだろうが、助詞モによつて可能性の一つを取り立て、「しれぬ」によつて判定不可能を示すところから生じる、他の可能性も許容する性質により、その判断に対する話し手の確信の度合いは低く感じられよう。

〈3-15〉「…かもしれない」と「…かもしれぬ」

他動詞形「しらぬ」が用いられた、「かもしれぬ」の例を次にあげるが、「かもしれぬ」と同じ意味用法であるように思われる。

(27) 片田舎へ江戸の縁者から、らうそくを一ト箱遣れバ、一家残らずあつまりて、是ハ替つたものだ。何ンで有ると評判しても、いつかうわからず。ひよつと喰ものかもしれぬと、一ト口喰つて見れば、しごくやわらか故(評伴の俵「嘶本大系」)

(28) 蓋跣は老君子愛妾の末葉かも知らず(感跣醉裏「洒落本大成 第三卷」)

(29) 蛙の面に水かもしらぬが、爰をよく聞かれよ。(賣卜先生糠俵

30) また、よくには根もない。茎もない。あるのかも知らんが、土にもはいらんし、上にも、のびん。(国定読本用語総覧・第一期)

用例では、「しらぬ」と「しれぬ」が交替することにより、必ずしも意味が異なるわけではなさそうであるが、「しらぬ」を含む表現が疑いの表現「かしら」を成立させ、「しれぬ」を含む表現が「かもしれない」を構成するのは、それぞれの語彙的意味によると思われる。

〈4〉下二段活用自動詞「知る」について

下二段活用「知る」を構成要素を持つ形式を求めようとすると、「かもしれない」にふくまれている「知れる」の持つ可能・自発的な意味は、古代語には見られないようであった。

古代語における下二段活用自動詞「知る」は、受け身あるいは使役的な用法とされる。「万葉集」では、

◎春野尔 安佐留雉乃 妻恋尔 己我當乎 人尔令知管(はるのの に あさるきぎしのつまごひに おのがあたりを ひとにしれつつ) (万葉集・巻八・1446)

◎命方貯 借薦之 心文小竹荷 人不知 本名曾恋流 氣之緒丹四天(いのちかたまけ かりこものころもしのに ひと しれず もとなどこふる いきのをにして) (万葉集・巻十三・3255)

のように、人に「知られる」あるいは「知らせる」ことを表す用法であり、「源氏物語」では「ひとしれず」という固定化した用法のみが見られる。現代語の「知れる」に相当するような可能・自発の意味を表すには、次のように四段活用他動詞「知る」に助動詞「る」を接続したようである。

◎おきて行空も知られぬ明けぐれにいつくの露のか、る袖なり (源氏物語・若菜下)

中世後期の資料になると、可能・自発的な意味を持つと思われる下二段活用自動詞「知る」があらわれる。

◎道ノニアルヲ岐ト云ソカヨウカ、ヨハヌカ知レヌソ (蒙求抄 1・40・ウ)

◎誠にあひてがなふてはせうぶがしれまひ、汝とれ(虎明本狂言・かずまふ)

◎尤さやうにおほしめすは道理じや、去ながら只今しる、事じや程に、なをしたひとおもやはいのりなをひてしんぜう(虎明本狂言・こしいのり)

なお、次のように、古代語では、四段活用他動詞「知る」が用いられているところに、近代語では下二段活用自動詞が、慣用的に用いられるようになってくる例がある。

◎さても、わが身、行くへも知らずなりなば、たれもくあへなくいみじとしばしこそ思ふ給はめ(源氏物語・浮舟)

◎大風にて京の大仏様、御目の玉とびいで、行方しれず(斬本・

◎松竹梅のかけもの、ゆくへもしれず。(断本・東都真術)

ある不確定の要素を持つ事象に対して、主体が「知らない」と認識するか、対象の側に対して「知れない」と確定不能の認識を持つか、古代語と近代語の境において変遷があったのかもしれない。「かもしれない」に相当する固定した表現形式は古くは見られないようであるが、現代語においては対象の側に属する可能性として客体的に認識されるような場合も、疑問や推量によって主体的に認識されていたのではないだろうか。

〔6〕まとめ

ここまで、「…しれぬ」について、形式上四分類して述べてきたことを、以下にまとめたいと思う。

「しれぬ」と判定される不確定の要素が(a)不定語で示されるものおよび(b)複数の案の提示で示されるものについては、「しれぬ」はその不確定の要素に対して「わからない」という語彙の意味を表す。不確定の要素について(c)一つの案が提示されるものは、話し手ですでに一つの可能性を選択し解答案として挙げていることから、「わからない」という語彙の意味が薄れやすい。このうち、(B)「…かしれぬ」は「かもしれない」と置き換え可能な表現を為すが、文末に用いられた場合、可能性判断というよりは、話し手の推量による不確実な判断を表す性格が強い。これは(C)「…もしれぬ」と(D)「…かもしれぬ」の共通要素である助詞モを欠くためと思われる。

「かもしれない」の成り立ちについて

助詞モは類似した事物の中からある事物を取り立てる、逆に言えば有る事物を取り立てることで、類似した事物の存在を暗示する、とされる。ある事象について判断しようとする際、眼前に現実として存在しない事象のありようとしては、「ありうるコト／モノ」としてしかない。その中から想定しうる一つのコト／モノを取り上げることが示すのが助詞モであり、他にも「ありうるコト／モノ」としていくつかのコト／モノが存することを含意する。同じく眼前に事実として存在しない事象をとらえる場合でも、「だろっ」「にちがいない」などの形式においては、形式そのものにはほかのコト／モノを含意しない。言い表わされたことが、すなわち話者が真実であるのとらえる事象である。

ありうるコト／モノすべての中からあるコト／モノをとりあげるのは、実際の言語表現としては危惧や期待を表わす場合が多いのではないかと、ということが未然の事象についての(C)(D)の用例からうかがえる。古代語の「もぞ」「もこそ」が危惧の表現とされることが考えあわせられよう。

モを伴うものとカモを伴うものは、ほぼ同じ性質を持つと思われる。未然の事象について、起こる可能性のある事態を想定し、挙げる用法が先行するが、早い時期のものでは危惧される事態を挙げる用法が多い。

十八世紀の半ば頃から、現実の事象について可能性の判断がなされたものとみられる例が現れる。現実の事象の場合、発話に取り上げられる「可能性」は、話し手の推量によるものである場合が多い。特に、「…かもしれない」という判断の根拠が、原因を表すカラな

どによって示される場合は、それがより明確である。

可能性の判断を表す用法が確立したのには、未然の事象の想定
の用法においても、危惧の念などによらない想定がなされるよう
になったと考えられる。

「……もしれぬ」にも、「かもしれない」のような可能性判断の用法
がみられるのだが、近世には多くみられるこの形式は、近世以降衰
退し、助詞力を有する「……もしれぬ」がまとまりの形式として
定着し現在に至っているようである。

なお、「かもしれぬ」は、一つの可能性をあげ、確定不能とする
意味から、その他の可能性も許容する性質があるため、話し手の推
量に関わる表現の場合には低い蓋然性を示し、また婉曲や譲歩の表
現に用いられるものと思われる。このような用法は明治時代初期に
は出揃って見られる。(注7)

「……しらぬ」形式との関わりについても、若干の予測を述べてお
きたい。

「しらぬ」が、ある不確定の要素や真偽判断に関して、話し手が
解答を持たない事を示す事から、前接の助詞力と熟合し疑いを表す
形式となつて、終助詞化し、「かしら」を成立させたのに対し、「し
れぬ」は、対象の側に確定不能の判定をすることから、助詞モをと
もなつて、真で有り得る事象の中からある事象を想定して示すとい
う、むしろ客体性をもつ表現形式「かもしれぬ」を成立させたと考
えられるが、「……しれぬ」の形式の場合、「しらぬ」と交替した例に
も意味的な差が感じられない場合がある。

「しらぬ」と「しれぬ」の違いは、同じ事物における話し手の認識

の仕方の違いによるともいえ、その接点において交替可能なのであ
ろうか。

〈7〉おわりに

本稿では、「かもしれない」の形式が固定化する以前の「かもし
れない」に類する形式を考察し、その用法の成立を、近世初期に現
れる未然の事象の想定を示す「……もしれぬ」「……かもしれぬ」の形
式が、現実の事象についての想定がなされた場合、可能性の判断を
示すようになったところにみた。現代語においては、「かもしれない」
は可能性の判断を基本的な意味とし、用法として蓋然性の低い推量
や、婉曲表現をなすと考える。

なお、口語で「かかも」「かかもね」など、「しれない」の部分
を略して使われることがよくあるが、その場合活用はなく、文末に
しか用いられないのであり、終助詞的なものとなっているといえよ
う。(注8)

(注1)次にいくつかの論考における現代語「かもしれない」に関す
る記述を要約してあげる。

仁田義雄(1981)

○その事象が、実際に成立することもあれば、しないこともある、
或いは真であることもあれば真でないこともある、といった事
象成立の(蓋然性)を表す。

○それは「もしかしたら」「ひよつとしたら」と共起し、「かなら
ず」「きつと」と非共起であることから、確からしさの低い、

そうでないこともあるといった含みを有する（蓋然性）（弱蓋然性）である。

寺村秀夫（1984）

○助詞二つと動詞の否定形が結びついて一語の助動詞化した、いわゆる組立て式の助動詞である。ダロウと同じく、自分の主観による簡単な推量を表す。ダロウとの違いは、その推量の妥当性についての確信の度合いが低いことであろう。「……でないとは言えない」「……の可能性もある」というぐらいのきもちである。

野田尚史（1984）

○直接的な推量や論理的な推論によって、ある事柄が真実である可能性を述べる複合辞の一つ

○推量の結果、それが真実である可能性があまり高くないと判断された場合に用いる。

中島孝幸（1993）

○ある事柄自体の真である可能性を問題にするというより、ある事柄に対する話し手の確信がどの程度のものであるかを表す。

○その確かさ（話し手の確信）の度合いは「にちがいない」において強く、「かもしれない」において弱い。

（注2）三宅知宏（1992）では、認識的モダリティの定義を、「命題（文において、客観的な事柄内容を表す意味成分）の真偽に関する話し手の認識を表す意味成分」としている。

（注3）打ち消しの助動詞の部分は「……ぬ」以外に「……ず」「……ない」「……ねえ」などがあるが、ここでは「……ぬ」に代表させることにする。

「かもしれない」の成り立ちについて

（注4）「どれ・どちら・どんな・どう」など下系の指示語を含むものや、「何」を含む疑問語などをさす。

（注5）村上昭子（1981）では、大蔵流の狂言台本、虎明本と虎寛本の用例の比較検討により、「かしら」の成立について考察し、次のようにまとめている。

①「……しらぬ」という疑問表現は、疑問表現における「問い」の表現と「疑い」の表現のうち、「疑い」のほうをあらわすものであると認められる。

②「……しらぬ」という疑問表現は、「疑問表現・しらぬ」という構成であり、「しらぬ」は、本来、「知らない」という意味であった。

③この「しらぬ」の（知らない）という意味がうすれ、「しらぬ」に先行する疑問表現の「疑い」を補強するような役割をはたすようになる例が、虎明本に見られる。

④虎明本と虎寛本とので、「説明要求の疑問表現・しらぬ」のばあいの疑問表現の形式に相違がある。

⑤「疑問語……か・しらぬ」という形式が、虎寛本に見られるが、これは、「説明要求の疑問表現・しらぬ」の形式が「疑問語……か・しらぬ」に収束していく方向にあることをしめす。

（注6）この場合、助動詞ウ（）は推量を表すわけではないが、便宜上こう呼ぶことにする。

（注7）高山善行（1996）は、モーダルな意味を表わす表現形式の意味変化について、「外面的状況を描写する意味」から、「内面的状況を表わす意味」へと変化する方向性の原則が日本語にもほ

はあてはまるのではないかと予測している。「かもしれない」の成立は、この原則に沿うものと思われる。

(注8)澤田治美(1993)では、主観的助動詞に対する制約「否定形にならない」「過去形にならない」「疑問形にならない」「時・条件の副詞節に支配されない」「文代用形の指す範囲に入らない」に該当するかどうかにより、「ウ・ヨウ・ダロウ」を主観的表現とし、「ラシイ・カモシレナイ・ハズダ」などを主・客の中間的表現としている。

※本文中の用例は、以下のテキストを使用した。なお、原文のルビは省略している。

池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究』表現社

武藤禎夫編『嘶本大系』東京堂出版

大野晋・大久保正編『本居宣長全集 第三卷』筑摩書房

近世文学総索引編纂委員会『近世文学総索引 近松門左衛門』教育社

育社

近世文学総索引編纂委員会『近世文学総索引 井原西鶴』教育社

大塚光信・岡見正雄編『抄物資料集成』清文堂

大塚光信編『統抄物資料集成』清文堂

洒落本大成編集委員会『洒落本大成』中央公論社

『伊呂波文庫』『心学道話集』有朋堂

長澤規矩也編『唐話辞書類集』汲古書院

吉田澄夫翻刻『黙齋先生語録』『近代語研究 第四集』

森山隆・鶴久編『萬葉集』桜楓社

国立国語研究所編『国定読本用語総覧』三省堂

〈参考文献〉

仁田義雄(1981)「可能性・蓋然性を表す疑似ムード」『国語と国文学』687

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
野田尚史(1984)「しにちがいない／＼かもしれない／＼はずだ」『日本語学』3-10

三宅知宏(1992)「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢日本語学篇』

中畠孝幸(1993)「確かさの度合いーカモシレナイ・ニチガイナイー」『三重大学日本語学文学』4

牧原 功(1994)「蓋然性判断のムード形式と疑問化」筑波大学一般・応用言語学研究室『言語学論叢』13

丹羽哲也(1992)「過去形と叙述の視点」『国語国文』61・9
村上昭子(1981)「終助詞「かしら」の語史」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』

佐々木峻(1993)「大蔵流狂言詞章の文末表現法ー「…：か知らぬ」「ちや知らぬ」等の言い方についてー」『近代語の成立と展開』和泉書院

堀崎葉子(1995)「江戸語の疑問表現体系についてー終助詞カシラ」の原型を含む疑い表現を中心に」『青山語

文』25

外山映次(1957)「質問表現における文末助詞ゾについて―近世

初期『京阪語を資料として』、『国語学』31

安田 章(1990)「疑問表現の変遷」『外国資料と中世国語』三省

堂

山口堯二(1999)「推量体系の史的変容」『国語学』165

山口堯二(1999)「日本語疑問表現通史」明治書院

重見一行(1988)「む」は「推量」か／『国語国文』57―2

田中章夫(1977)「近代語における複合辞的表現の発達」『松村明

教授還暦記念国語学と国語史』

石神照雄(1993)「推量の認識と構文」『国語学』174

金田一春彦(1953)「不変化助動詞の本質(上)(下)」『国語国文』

22巻2・3号

澤田治美(1993)「視点と主観性―日英助動詞の分析―」ひつじ

書房

大鹿薫久(1992)「『かもしれない』と『にちがいない』―叙法

的意味の一端―」『ことばとことのは』第九集

和泉書院

大鹿薫久(1993)「推量と『かもしれない』『にちがいない』―叙

法の体系化をめざして―」『ことばとことのは』

第十集

須賀一好(1995)「『かもしれない』の意味と蓋然性」『山形大学

紀要(人文科学)』第十三卷五号

「『かもしれない』の成り立ちについて